

## 靴の歴史散歩 ⑨7

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

トモエヤの『レザア レコラダア』に、これまで知られていなかった「マッキンレー靴」の製造システムが明かされているので、少々長くはなるが書き移しておきたい。

「弊社がマッキンレー靴を我が市場へ紹介す候事に関しての一の動機は、製靴の先進国たる米国製靴業発達の歴史を研究せしに出でし義に御座候。

米国製靴業の発達成績に著しきものあるは、各位に於てつとに御了承の事と存じ候。なかんずく万事に節約を旨とせる分業制度を利用致し候事は、製靴当事者にとり多大の利あるのみならず、最も完全なる均一制靴を製出するの便宜を整え得るため、一般にこの方法を採用致し居り候。

弊店はこの点に着目留意致しマッキンレー靴輸入に際し、この分担法を利用するに相決め申し候。即ち原料の豊富なる米国より、すべからく半製品の状態において原料を輸入し、比較的賃金の低き吾邦の労力をこれに加えて、完全なる均一制靴マッキンレーを発売し、一般の需要者各位が受けつゝありし多大の不便を、適当に補足するの設備を相整え申し候。故に弊店の一手販売にかゝるマッキンレー靴は、アップアス（上皮）ヒール（踵）パンプ（上包）ソール（底）その他一足の靴を構成するに必要な全ての部分を、一個の小釘鉋に至るまで半製のまま、輸入し、各部を弊社附属工場において集合の上、初めて一個の完き商品として各位の御需要に応ずる義に候。」とある。

マッキンレー靴の発売に関しては、アメリカからマッケー式製靴機械を輸入し、

ジェームス・グリーンレー技師長ほか三名の技師の指導の下、自社生産をしたぐらいは承知しているが、まさかそれが、いま中国などの生産などで行なわれているノックダウン方式（半製品で輸入し、後に組立製品化）であったとは、百年以上も前のことだけに驚きである。

もう一つ特筆すべき事は「現今製造致し居り候種類は『深編上げ』及び『深ゴム入り』の二種にこれあり、代価の義は米国風に倣い、文数大小を問わず均一の価格をもって販売致し居り候。」とあるところである。当時業界の商習慣では、文数が一サイズ上がる毎に、五銭高というのが一般的であったので、均一価格での販売は、それだけで、画期的商法だったのである。

時あたかも日露戦争の真っ只中、戦意高揚に「征露靴」と名付けた編上げ靴も販売している。（写真参照）ロシアの「露」の字の活字だけが、横に倒されているのが目に付く。時局に合わせた編集のアイデアだったのであろうか。



トモエヤ征露靴の広告文